思い出

廣川　和子

1977 年の 9 月から翌年の 3 月まで、主人が研究員としてロンドン大学に在籍していた時、古典学研究者の M 教授もたまたま同じ大学におられてお話する機会がありました。そして教授のお宅が我が家に近いことを知った主人が夕食にご招待したことからおつきあいが始まりました。

一回目は教授の大学からのご帰宅途中でしたから、ようやくうちとけて少年時代の思い出話が始まった頃には早くもお帰りの時刻になっていました。ほどなくして、今度は私共が先生のお宅へのお招きを受けました。お食事の前に日本の詩が話題に上りかけたのですが、この日はお料理とお食事にとても時間がかかり、食後ゆっくりお話する暇がありませんでした。それで再び招待状を差し上げると、先生も待っておられたようですぐにおいでになりました。この日のことを記録した未完の原稿が最近みつかりましたので、少し長くなりますが、この先は主人に語ってもらいましょう。

ロンドンの連歌

廣川　洋一

――前・中略――

夕食の後はすぐにこの前の続きの少年時代の話になった。

「八つの時にギリシャ語を始めました」と先生は言われた。偉いものである。こちらは仕方がないから、

「ぼくの八つの時は、新潟というところで毎日スキーばかりやっていましたよ。冬になりますとね、雪が二メートルも三メートルも積ります。普通は屋根から道に落ちて怪我すると言うでしょう。ところが僕らは道路から屋根に落ちるのです。雪に階段を作って、出入りするのは二階の窓からなのですよ」とこんな具合。

続いて先日話題に上った日本の詩、特に連歌の話をすると、先生が突然「どうです、僕らもその連歌とやらをやってみようではありませんか」と切り出された。連歌の話

はしたものの、実践できるなどとは思ってもいなかった私は面食らって暫く躊躇していたが、食後に飲んだシェリー酒がまわって気が大きくなっていたらしく、受けて立つ気になった。「言葉の問題がありますが…ではこうしましょう。僕がまず日本語で、つまりローマ字で始めてそのおおよその意味を言いますから、先生は英語で付けて下さい」と私が言って、“連歌らしきもの”が始まった。

発句は、その場や時や連衆などに縁のあるものを詠みこむことが求められるから、

浅き春　英都（みやこ）の水に　光さす

として三月は早春のテムズ川にまず挨拶する。本来は一座の賓客が発句を出し、座の亭主格が脇句を付けるらしいが、ここでは、不慣れだからというので、まず私が発句を出し異郷の空に挨拶する格好になったのである。

The rain falls
but not between friends

というのが先生の脇句で「肩並べ行き　雨煙るなり」というところだろうか。ここまで来た時、「二人で歌仙をやると、五・七・五　七・七の同じ調子ばかりに当って面白くないなぁ」と私が言って思案顔をしていると、先生が、「では、私が英語とギリシャ語の両方でやりましょう」と仰る。（両吟の場合は A・B　B・A とするなど他にもやり方があるのだが、その時の私は知らなかった。）　英語で書くのと同じ位の時間をかけて先生が詠まれたものを見ると

συνθάλλουσι　τοῖς
δένδρεσι φυχαὶ
βροτέαι

と、上品な筆致で、しかも見事な古典ギリシャ語で第三句が書かれている。樹々の間から人間たちの魂が萌え出ているということのようだ。日本語に直せば、「樹間より優しき命萌え出（い）でぬ」というところか。

春の句が三つ続いたから一寸気を変えようと思って、

子らの声して　夏の宵来ぬ　と続けた。暫くすると、M 先生、英語とギリシャ語の二つの句をすらすら書いてこちらへよこされた。

Why does the traffic
not listen to their teaching?

突差にはどういう意味か分からず怪訝な顔をしていると、「ロンドンも車が多くなって往来が危険になってきている。子供達が逆に大人に注意したり危険を指摘しても、往来の車はその声に無頓着で意にも介さないのだ」という意味のことを言われた。「往来の車は聞かず子の諭し」というところか。

次のギリシャ語の句は折端（おりはし）にあたる訳だが、

ἄνθρωπος　γὰρ
ἀψύχων　διδάσκαλος

とある。少し付け過ぎかな、と思ったがなかなか面白い。教師というものは馬鹿なものだから、「教え説く師のつねに力無く」

と原稿はここで終っています。そしてその次の頁に、十二句までの未完の“連歌”が並んでいました。

1	浅き春英都（みやこ）の水に光さす	（春）	H
2	肩並べ行き雨煙るなり	（春）	M
3	樹間より優しき命萌え出（い）でぬ	（春）	M
4	子らの声して夏の宵来ぬ	（夏）	H
5	往来の車は聞かず子の教え	（雑）	M
6	教え説く師のつねに力無く	（雑）	M
7	禅僧の独り読経す冬の月	（冬）	H
8	高き窓より入れる真実	（雑冬）	M
9	今堅き氷も明日に融けるらむ	（冬）	M

10　　櫂の音して菊香るなり　　（秋）　H
11　柿の実の一つ残りて地の肌の冷ゆ（秋）　M
12　　希望歌いて宵星の見ゆ　　（雑）　M

The unfinished　“Ka-sen”(thirty-six links) by two poets(?) at Fellows Road in London.

14th March, 1978

i　Asaki haru
miyako no mizuni
hikari sasu

Spring still shallow
a transparent light
over the Thames

ii　The rain falls
but not between
friends

Kata narabe yuki
ame kemuru nari

=

A gentle spring rain
is falling on friends
walking abreast

iii　συνθάλλουσι　τοῖς
δένδρεσι φυχαὶ
βροτέαι

Konoma yori
yasashiki inochi
moë idenu

iv　Kora no koë shite
natsuno yoï kinu

A mong the peaceful
voices of children
early summer evening
creeps

v　Why does the traffic
not listen to their
teaching ?

Ôraï no
Kuruma wa kikazu
Kono oshië

vi　ἄνθρωπος　γὰρ
　　ἀψύχων　διδάσκαλος

Oshië toku shino
Tsuneni chikaranaku

vii　Zen-sô no
hitori dokyosu
fuyu no tsuki

Lonely winter moon
a Zen-priest
praying

viii　Truth may enter only
through the upstairs
window

Takaki mado yori
Ireru shingitsu

ix　Τὸ δὲ σήμερον παγὲν
αὔριον ἀνήσεται

Ima kataki
Koorimo asuni
tokeruran

=

Now the ice formed
firmly,
tomorrow it will
melt soon

x　Kai no oto shite
kiku kaorunari

Oh hear
Some one rowing,
flavour,
chrysanthemum blossoms

xi　The ripe plums are poised
over the cooling earth

Kakino mino
hitotsu nokorite
chinohada no hiyu

xii　ὁ δ᾽ Ἕσπερος ἀστὴρ
　　εὔελπί τι ὑπᾴδει

Kibô utaite
yoïboshi no miyu

予定のお茶の時間がきた時、歌仙連歌はまだやっと三分の一を巻き終えたところでした。その日のお菓子は焼きたてのパリパリした皮に熱あつのカスタードクリームを詰めた小さな丸いシュークリームでした。お皿を目の高さに持ち上げて上にかかった粉砂糖の融けるのを眺めておられた先生が「何という可愛らしいフォルムだ！これは詩のように美しい」と、普段の先生からは想像できないようなはしゃいだ言葉を口にされましたので、「お腹の空いた時は詩よりお菓子ですね」と吹き出しながら私が申しますと、横から主人も「日本ではこんな時花より団子と言うけれど、あっ少し違うか」などと混ぜっ返します。その賑やかで楽しいお茶の時間が思ったより長引いたので、連歌の残りはまたの機会にということにして、その日は双方ともに満足してお別れいたしました。

けれどもその後教授も主人も忙しい日が続き、どちらへの訪問も実現できずに私共は帰国することになりました。

十数年後、学会の招きで来日された M 教授に再びお会いし、箱根や信州などへのご旅行にお供しましたが、いつも忙しい日程で「あの時は楽しかったですね」と思い出話をするだけで連歌はとうとう未完のまま終りました。

これが世界的古典学者 M 教授との、はるか昔の楽しかった思い出です。

M 教授も数年前に亡くなられました。今頃二人はどこかでばったり出会い、もう仕事も時間も気にすることなく連歌の続きを楽しんでいるのかも知れません。残りの 24 句がどんなものになっているのか見てみたいものです。